

令和5年度 全国高校総体静岡県予選 大会展望

文： 中島 洋己

((一社)静岡県バスケットボール協会広報委員長・県立科学技術高校教諭)

令和5年度第71回全国高校総体静岡県予選が令和5年5月27日に浜松市立高校体育館他で開幕する。まずは大会概要に触れさせていただく。昨年コロナ対応により5日間で実施されたこの大会、今年では従来の形式に戻り4日間で実施する。最大のレギュレーション変更は今年から決勝リーグ制を廃止し、トーナメント制に変更となった。しかしながらウインターカップ県予選とは違い完全トーナメント制ではなく、5位決定トーナメントと東海総体出場権を賭けた3位決定戦も行う。これは令和元年度から静岡県の全国総体出場枠が男女各2枠から「1枠」となったことから、トーナメント制実施に踏み切ったと聞く。上位チームは最大5試合、2日目以降は1日1試合の実施となり、よりその試合に専念できる環境が整った。28日に引佐総合体育館(引佐アリーナ)で行われる準々決勝を制した4校による準々決勝と5位決定トーナメントが6月3日に袋井市・エコパアリーナで行われ、4日に同じくエコパで決勝戦と3位・5位決定戦が行われる。優勝校は7月27日から北海道札幌市・北海きたえーる(北海道立総合体育センター)他で開催される全国高校総体へ、上位3校が6月17日・18日に地元静岡県浜松市・浜松アリーナで開催される東海高校総体への出場権を獲得する。

令和元年末から全世界で猛威をふるい続けた新型コロナウイルス感染症も完全収束とは言えないが、今年5月8日から感染症法上の5類相当に引き下げられて分類されるようになり、いわゆる季節性インフルエンザと同じ扱いとなった。県協会および県高体連ともに同日をもってコロナ対応ガイドラインの適用を終了し、事業・活動に対し原則行動制限を行わないこととした。そしてマスク着用・手指消毒などの感染症対策も個々の判断に任されることとなった。従って今大会は試合観戦の人数制限等行われないこととなり、4年ぶりに観客と声援が戻ってくるとは大変喜ばしく、まさに4年前以前の「ビフォーコロナ」にタイムスリップしたかのようであるが、我々運営側・応援する側、そして選手・スタッフも「アフターコロナ」を見据えた感染症対策を十分に施し続けて大会に臨む必要があるように思える。「ウィズコロナ」から「アフターコロナ」への変革過渡期での実施となるが、運営面でも細心の注意を払っていきたい。

今年度も例年同様、各ブロック総体優勝チームの所属都道府県(関東は優勝・準優勝)に年末のウインターカップ追加出場枠が与えられることになり、東海総体優勝チームを輩出した県はウインター出場権が「増枠」となる。そのためにも各県はより強いチームを東海総体に送り込み、ウインターカップの追加出場枠を獲得する使命も担っていると言えるだろう。

さらにこの大会は全日本選手権(オールジャパン)県予選の出場選考も兼ねており、上位2チームは8月26日・27日に静岡県バスケの聖地・静岡県武道館で行われる県代表決定トーナメント大

会の出場権を獲得することはご承知の通りだが、昨年に続き8月に愛知県および三重県で2度目の開催となる「日清食品リーグU18競技大会東海ブロック(通称:U18東海ブロックリーグ)」への出場義務も負うこととなる(すでに藤枝明誠は「トップリーグ」への出場権を獲得しているため、男子は状況によって3位が繰り上がりで出場する可能性もある)。このリーグ戦は全国屈指の激戦区・東海ブロックの強豪校と連続して対戦する絶好の機会であり、チーム強化にとってはこれほど効果的な「良薬」はない。その証拠に昨年度本県から出場した男女4校は他チームが味わえない貴重な経験を積み上げて4校ともウインター県予選決勝の舞台に戻って来た。もちろんどのチームも今大会での勝利が最優先事項であるが、長期的な強化ビジョンを考えればこの大会への出場権も是非でも手に入れておきたいと思っているであろう。

今大会からトーナメント制になったことで優勝・全国を目指すチームは「絶対に負けが許されない」という緊張感のある戦いが求められる。決勝リーグ制の時は1敗しても得失点差で優勝、また全国総体出場枠が2枠あったときは2敗しても全国出場が決まるという場合もあった。しかしながらこれからは1敗も許されない戦い、たとえ1点差でも勝ち続ける以外全国への道はない。そういった意味で緊張感あふれるトーナメント制の醍醐味を味わっていただきたい。

コロナが5類相当に引き下げられたことになり、感染者数も全数把握から**定点把握**に変わり、流行の度合いがわかりづらくなっているが、潜在的な感染者も間違いなくいるはずである。現に先日発表された初の定点発表では県内は増加傾向にあるという発表も出された。今後も各自最大限の感染症対策をしていただき、プレーも応援も「アフターコロナの意識」でバスケットボールを楽しんでもらいたいと思っている。コロナ禍4年目で迎える今大会、コロナだけでなくインフルエンザでも学級閉鎖などという報道を時折耳にする。今大会も棄権チームを出すことなく全日程が終了することを心から祈っている。

なお、この大会展望執筆においては、私の右腕として職責を務めてくれている山口裕史県協会広報副委員長に多大な御尽力をいただいた。この場を借りて御礼を申し上げるとともに、情報収集の場を提供してくださったチーム関係者皆様にも心から感謝の意をお伝えしたい。

《出場・優勝等の連続・連覇表記について》

令和2年度にすべての「総体」が中止となったため、今回も優勝や出場回数を記載する際に一部実際の回数と年数の整合性が取れない部分が生じました。統一をはかるためにも今回は「年数」を基準にして記載させていただいたことを御了承下さい。一部大会の連続出場に関しては解釈の都合上「大会」を基準にしているものもあります。なお、連続記録や連覇に関しては大会中止分を考慮せず、「記録継続中」と解釈して記載させていただきました。